郷土館発

絣（かすり）

民俗のコーナーに、機（はた）織り機で機（はた）を織る女性が再現されている。その足元に「美術会撰織法」と「美術会撰織筆記」という二冊の冊子が置かれている。東納庫の原田はつねさんが明治から大正に活用していたものである。

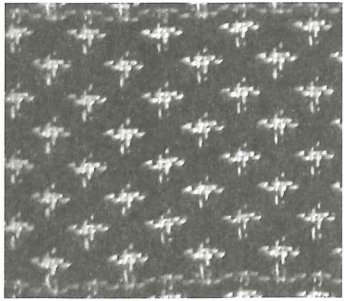
いずれも記録されているのは、染め分けた経（たて）糸、緯（よこ）糸の組み合わせ方により、何という名前の模様が織り出せるかというものである。素人が見ても何が書かれているのか全く分からない。

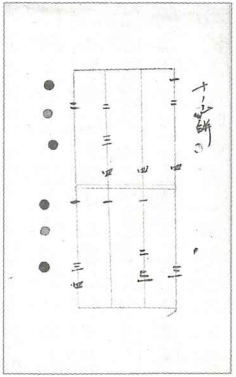
昨年、武豊町の小林さんという方が、当館の冊子を元に実際の絣（かすり）を織り上げて提供してくださった。小林さんは高機（たかばた）の研究を長年続けておられ、その奥さんは御自分で機を織られるそうである。素人にはどんな模様になるのかは分からないが、小林さんは忠実に再現してくださった。二十二種類の模様すべてを織るのに数年かかったそうである。染から織り上がるまでに、あるホームページによれば三十位の工程を踏まなければならないそうであるから、随分手間暇をかけてくださったことがうかがい知れる。

糸で縛って防染するなどの方法であらかじめ染め分けた糸を経糸に使用するものを経絣、緯糸に用いたものを緯絣、経糸・緯糸の両方に使用したものを経緯絣という。生み出された模様の輪郭には「かすれ」が見られる。これが名前の由来のようである。

実際の布と名前を見ると成程と思われるものがいくつもある。写真の模様は「十の字絣」と名付けられたものである。この他「二の字絣」、「井桁絣」、「蜻蛉（とんぼ）絣」など、模様の形状から名づけられたものが多いようである。

郷土館で、昔ながらの素朴な味わいを楽しんではいかがでしょうか。





十の字絣（上）と
糸の組合わせ図（左）

（奥三河郷土館長　平松　博久）